

“S. アンドレスキー著『社会科学の神話』”

をめぐる省察

——日本経営学：八百万の神々に関する随想——

裴 富 吉

目 次

I はじめに	4. 第7・8・9章より
II 本 論	5. 第10・11・12章より
1. 「はしがき」より	6. 第13・14・15章より
2. 第1・2・3章より	7. 第16・17・18章より
3. 第4・5・6章より	III む す び

I はじめに

最近、筆者の目にとりも強くともった著作が刊行された。それは、S. アンドレスキー著、矢沢修次郎・熊谷苑子訳『社会科学の神話』日本経済新聞社、昭和58年（Stanislav Andreski, *The Social Sciences as Sorcery*, 1972）である。本書の原題を直訳すれば、『呪術としての社会科学』となる（同書、〔訳者あとがき〕297頁）。

筆者は、日本の社会科学界のなかでは最大級の規模をほこる、日本経営学会の一員であるが、どうやら、この「学界」においても、〈社会科学としての呪術〉がはびこっている事実を痛感せざるをえないのである。

筆者は、『日本経営学史—規範学説の研究—』（白桃書房、昭和57年）や、『日本経営思想史—戦時体制期の経営学—』（マルジュ社、1983年）の公刊をとおして、斯学界の権威的理論が批判されねばならないという、あまりに当然な学問上の姿勢を、うっかり〔!〕にも、とっている。これに対する、御当人たちや、その「信奉者たち」がしめした、素朴な反撥が興味ある現象として生じている。

この国においては、欧米、とくにアメリカとドイツの経営学に関して甲論乙駁、はてることをしらない展開があり、またそこでは熱のこもった議論がたたかわされるのにくらべて、斯学界そのものが産出してきた「自説」に対する吟味・批判は、まことに貧しい状態にある。他国^{おつべい}の横文字文献の討究はさかんだが、^{にっぽん}自国の縦文字文献（このごろは横組みの書物が多いが）は、二流以下のあつかいしかされていないようである。よく考えてみると、このことは大変おか

しい事態である。

それでも、自身の足元の問題を正面からとりあげないのは不自然だという、ある意味ではきわめて当然な反省がおこるなかで、いわゆる「日本的経営論」が隆盛をきわめている。しかし、そのさい、自前の方法・手段で、それに挑戦する識者は少なく、やたら外国じこみの理論武装をもって研究しようとするばあいが多い。これが、いちがいにせめられるべきことではないにしても、日本の問題に外国製の理論をただちにあてはめることは、あまり生産的とはいえない。とはいえ、悲しいかな、そうした武器しか所有していないのが、この国の学者の大部分における実状であった。

だから、自分の頭でものを考え、「日本経営」論を考察している、R・I教授の『日本的経営の編成原理』（文真堂、昭和52年）は、斯学界の権威を自認する学者から毛嫌いされている。いずれにせよ、同教授の著書は「日本的経営」論ブームに拍車をかける役割をはたした。

一方では、自国特製の学説・理論を軽んじながら、他方では、それが批判の対象にとりあげられる段になると、一転してその担い手たちは感情の横溢をせきとめられないかのように、なりふりかまわず相手（たとえば本稿の筆者）を罵倒するのが、この国の斯学界権威者たちの習性であるらしい。

彼らのかかげる学説とその理論は、学問検討の客体的な対象となって徹底的に究明、批判され、その真価を問われる必要がある。この手続をぬきにしたり、さげようとしたりする意識は、自分という存在じたいをみずから否定することになる。

なぜ、この国の経営学者は、論争をきらい、またなぜ、それを不得手とするのか、しばらく考えてみたい。——アンドレスキー『社会科学の神話』は、そのためのかっこうな手がかりを与えてくれる。

II 本 論

1. 「はしがき」より

アンドレスキーは、はじめにいう。——名声の高い著者は、よほど特別な性格の持主でなければ、自分の業績はまったくくだらなくて、名声に値しないし、自分はほらふきなのだけれども、崇拜者たちはとんまで、すぐにだまされてくれるので有名なだけだ、と正直にかくさず述べたりしないと思う。[もし、そんな人がいるとしたら、それはもう神わざである]。それでも、自分の分析は妥当だろうか、と疑問がわくときがあるかもしれない。しかし、世俗的な成功をおさめ、お追従を耳にしているうちに、やはり天分があるのだし、でっちあげた業績なのに、それを画期的なものだと信じこむようになってしまう（『社会科学の神話』はしがき、1頁。以下、本書からの引用は頁のみ）。

その例の端的なものが、S・M教授の理論：「経営二重構造論」である。同教授は、この理

論をつくっていく道程で、そうとう苦悶したようすがみられる。また自説主唱の実証的確認を試みたが、必ずしも成功しなかったという過去もある。それにもかかわらず、天下のH大学商学部教授であり、のちには日本経営学会理事長になったほどの人物であり、さらには周囲の畏敬も並たいていのものではないから、同教授は、いつのまにか、自説の画期的卓抜性を信じこむようになった。もちろん、同教授の理論への亜流的信奉者も少なくない。

このS・M教授は、すでに約20年前、本格的な理論批判をうけている。が、これに対しては、なにもなかったかのように処している。一言も答えず、それをうけ(?)ながしているのである。その批判をおこなったY・U教授の論説は、S・M教授の根幹を歴史科学的分析をもってつきずすものであったゆえ、なおさらのこと、それを無視し、黙殺しなければならなかったのである。

ここに、へんてこな事実がのこされている。Y・U教授から直接聞いたことだが、その同教授によるS・M教授批判に関して、第三者たちは、Y・U教授を「バカ正直」だと評したそうである。いったい、学問に「正直」に“バカ”がつくくらいの態度があって、なにが悪いのかと筆者は思う。つまり、斯学界の権威に盾つくのはまずいし、そうするのは「バカ正直」だというのである。げに、ふしぎな学問的風土である。

アンドレスキーはいう。——人間行動の科学的研究という名でまかりとおっているものの多くが、要するに呪術にすぎない(はしがき, iii頁)。

2. 第1・2・3章より

第1章「あえてさらす身内の恥」。——エセ科学の偶像を打ちこわすのは、比較的、容易である。それより、そのような偶像が、なぜひろくうけいれられたのか、そしていまもうけいれられているのはなぜか、を説明することのほうが興味をそそられるし、より重要なのである(8頁)。

これは筆者も同感である。斯学界の権威的理論といわれるものを批判することは、そんなにむずかしいことではない。だが、なぜ、そのようなものが、多くの支持をえているかのように映るか、このほうにむしろ問題があるのである。

アンドレスキーはいう。——こんなふうに私がラッパを吹いてみても、エセ科学をかこんでいる壁をこわせるとは考えていない。壁はがっしりしたたくさんの守り手たちがかためているからである(8頁)。

おそらく、権威的理論の保有者自身よりも、これの亜流的追従者のほうが、その権威的理論に自信をもち、期待をいただいていることは確かな事実である。

アンドレスキーはいう。——物質的利益に惑わされずに自分自身の頭で考えている人たちは、まだいるのであり、本書『社会科学の神話』は、まさに、こういう人たちを対象に書

その行動の結果こうなる、と仮定するのはなぜか、理由をしめさなければならなくなる(59頁)。

この国の経営学者を考えよう。マルクス主義経営学者たちは、自分のよってたつ価値観〔唯物史観〕を絶対視し、認識と変革の〈論理と倫理〉を区分できない。彼らは「哲学と科学」のあいだに生れる難問を、いともたやすく割りきれるのである。また近経的学者は、実証的研究という美名のもとに、「仮説→実証」をくりかえすが、その仮説や実証が、いったいなんのためおこなわれるかを問題にすることが少ない。社会科学者が基本的にもたねばならない、深刻な「問題意識」などは、どこ吹く風なのである。

第6章『「専門用語」という名の煙幕』。——不明瞭でもったいぶった専門語を使って、陳腐な中身をつつみかくしながら、最高につまらない事項をつかまえて、いやになるほどくわしく説明しようとする傾向がある(90頁)。

もしもあなたが、ある分野の本を何冊も修得し、そのうえさらに、そうとうな努力をつんだにもかかわらず、それでもやはり、社会学や心理学〔そして経営学〕の権威者のいったり書いたりしてきたことを理解できないのであれば、それはあなたの責任というよりはむしろ、その権威者の責任であると考えてのが道理にかなっているだろう。さらに、そこで述べられていることがすべて無意味ではないかと疑っても、それは正当だといえるのである(96-97頁。カッコ内補足は筆者)。

彼らの肩書きとか地位というものに、不当に圧倒されることもない。同じような理由で、有名出版社の奥書きだとか、著者の出版物の量だとかに、圧倒されることもないのだ。その本が売れさえすれば、内容が無意味であっても反対しないのである(97頁)。

斯学界の権威者が公刊している、実務者むけ書物の大部分は、それが「権威者」の著作であるという理由だけで売れている。そして、その内容が本当に実業界に大きな影響を与えているようには思えない。〈権威性〉と〈市場性〉は、いかなる相関関係にあるかを考えてみたくもなる。学界の権威者たちは、実業界より歓迎をうけているが、同時に相手にされていない面もある。庭にはいれてもらえるが、家のなかには招かれない客のようなものである。

アンドレスキーはいう。——不幸にして、精密科学においてさえも詐欺行為にもとづく事実があったし、実験をくりかえして報告されている知識の真偽を確かめることのできない分野では、たいていのことは、その人のいうがままにうけいれざるをえず(それは大いに問題である)、そこで自分の判断の材料になった資料の信頼度をはかろうとする歴史家は、資料の書き手の関心や性格を自分で確かめてみようとするだろう。科学的だと称する、現在の情勢に関する研究に、われわれが接するばあいにも、このような歴史家と同じように、用心してかからねばならない(98-99頁)。

この国の経営学界においては、権威者と位置づけられている先学を徹底的に批判しつくしたうえで、自説を展開していかねばならない若い学者たちが、その権威者の知識や主張を鵜

いたのである。考えることに興味をもち、みずから考えぬき、その考えを、たとえ自分にとって不利になっても発表する覚悟のある人は、いつの時代にもごく少数であった。もし、多数派の支持がなければ知識は進歩しないというなら、これまで進歩は全然ありえなかったであろう。なぜなら、過去—現在をつうじて、脚光をあげ金をもうけるには、はったりをきかせ空理空論をもてあそび、おべっかを使い美辞麗句をかさねて、人々を扇動したりなだめたりするほうが、論理的かつ大胆な思考によるより、ずっと容易であったし、簡単であるからである。真正な知識ならば、考察者の運命がどうなるうとも、知識じたいの価値はかわらずに蓄積されていくから、これまで人類の知識は進歩してきたし、これからも進歩しつづけるのである（8-9頁）。

筆者の、二著——『日本経営学史』『日本経営思想史』をかこむ情勢は、その内容に対するまともな理解（とくに後著にいえること）に到達させることを困難にしている。というのも、筆者が批判した対象は、アンドレスキーが〈多数派〉と称する一群に支持されている権威者たちであり、これに対して、その批判の立場は〈少数〔派〕〉に所属するからである。

ここで、〈多数派〉とは、権威者とこれの追従的盲従者がともに形成する「身内」^{サークル}同士を意味する。〈少数派〉とは、そうしたサークルに対する「批判者」を意味する。前者が優勢、後者が劣勢の関係にあるのは、いうまでもない。真理は頭数により左右されるか否か、という長年の懸案がここに登壇する。

〈少数派〉の立場に立つよりも、〈多数派〉の立場に寄ったほうが、人生のいきかたとしては数段も賢明でありうる。人間の感情的・心理的実存のありかたとしても、そうしたほうが、精神的にも物質的にもより安定的たりえよう。人間の弱い性が、学問追究のゆくてに待ちかまえている「茨」の道を回避させるのであろう。しかしながら、こうした選択が学問の正道——というものがあればの話だが——にもとめることは、疑いない。

第2章「呪術師の悩み」。——概して、彼らの専門知識は、学者たちが属している階級の多数意見となるべく一致する意見をいったほうがよい、と教えてくれる。もちろん、資本家階級のことではない。学位をもったサラリーマン階級である（25頁）。

サラリーマンは気楽な稼業だと、昔、流行歌にうたわれたが、この国では学者先生〔とくに大学教員〕ほど気楽な商売はないだろう。「三日やったらやめられない」のが、この商売と、なんとかであるといったら、叱られるだろうか。筆者の同期生に「三日……うんぬん」を実際にいった者がある。現実には、宮仕へのサラリーマンは、はたでみるほど楽でない。「すまじきものは宮仕へ」である。これにくらべれば、学者先生（＝学位をもったサラリーマン）ほどのんきな職業はない。大学への出講日以外、自宅で寝てくらすといつていいような生活をしている同業者が実際にいるとも聞く。この程度の学者にも、つぎのような仕事は十分できることになる。

アンドレスキーはいう。——いちばん安易な生きかたは、真実はなにかなどということに過度に心をくだかず、世間の人々が耳にしたいと思っていることを告げる、というやりかたである。だから、成功の秘訣は、当節人々がなにを聞きたいと思っているかを探りあてる能力にある。あやふやな、その場かぎりの、いわば常識的な知識しかなくても、社会科学の専門家は、言辞を弄して大きな影響をおよぼすことができる (26頁)。

大学教授と学生とのあいだに形成される「講義」ならびに「演習」という学問の教授方式は、考えようによっては、空おそろしい関係であるかもしれない。

第3章「大衆操作の裏表」。——学者は、いちど公表した説や勧告が、実はまちがっていたと認めるはめになることは、ほとんどありえない。なぜなら、いつでも、なんとかかんとかいて、自分の誤りを打ちけす議論をたてることができるからである。また、自分の好きな人(ないしは集団)が、思っていた人(集団)とは、全然ちがうとわかったときのあわてようは、なにか物質の性質についての考えを訂正するはめになったときのとまどいより、ずっとひどい (35頁)。

この論述は、前半は権威者に関するもの、後半はその追隨者に関するものである。とくに、後者はみずからの頭脳で考えぬき、なにかを築きあげていくという理論的能力を十分にもちあわせていないために、そのときのショックは、ひとかたならぬものになる。筆者がある権威〔と位置づけられている〕学者を批判したさい、その弟子にあたる学者がみせた反応(驚愕と当惑)は、まさにそのよい見本である。

アンドレスキーはいう。——すべての社会学者が、まったく知識を求めて、終りなき闘いにいどむほどの勇気をもっているわけではないから、たいていの社会学者は、権力側ないし民衆側のご機嫌をそこねないような問題設定・方法論・結論へと傾いていく。そんな問題のたてかたは不毛だとわかっていてもである。身の安全をはかりたという欲求に駆りたてられる結果、ときとすると、いきすぎなほど、世間の主流派的考えの風むきにしがたって、自分という帆を調整し、あわせたりもする (37頁)。

3. 第4・5・6章より

第4章「大量生産の功罪」。——読む価値のない本はどれかをみつけたすのによい方法は、第1に、いまベストセラーになっている本のリストに目をとおすことである (45頁)。

このことは、この国の経営学書にも妥当する。関係各出版社の「ドル箱」になっている権威者たちの専門書には、そうとう程度の悪い書物が多い。筆者が学史的研究の対象にとりあげたA・Y教授、K・U教授などの著作は、十中七・八までは、斯学界に〔まれには実業界にも〕不必要なものである。彼らは、ぼう大な紙くずとなるべき——再生資源化されれば不幸中の幸いだが——書物を、せっせと執筆している。

けれども、一般には、古い連中の同意を必要とし、創造的なものより、いわゆる「健全な」ものがよしとされる出版業界にあっては、偶像破壊を目的とするような著作は絶対にとりあげられない(47頁)。筆者は、『日本経営思想史』を公刊したのち、その想いを深めている。すっかり偶像破壊者きどりで、斯学界の権威的理論をまともに学問的に分析し、批判しようとしたりすると、出版社は、こちら側になにか非があるかのように接し、なかなか出版を引き上げようとはしなくなる。

アンドレスキーはいう。——なにを出版するかは、ただ党派の利害関係によってきめられるとしたら、権力の座にある人々の不興を買う危険を冒してまで、論争をよびそうな作品を出版をしようなどと考える人はいないだろう。まして偶像破壊的なものなどだめである。だけれど、そういう本を出版しなければ、自由な思想は死んでしまうだろう(48頁)。

筆者が『日本経営思想史』を公刊できたのは、こういう事情による。主流派が歓迎しない主題の本を書いても、少なくとも2,000部ほど売れるめどがたてば、学界政治に直接まきこまれていない出版社なら、これを出版して少額でも収入をえようとするだろう(49頁)。出版社は純粋に文化事業をおこないたいだろうが、営利的な採算性を無視できない資本主義的事業でもある。

書評について。——学生やかけだしの人たちの陥りやすいあやまちをさける手助けをしたい。まず第1に覚えておくべきことは、評者が著者よりも知識が豊富だなどとは、よほどの証拠がないかぎり、絶対に思ってはいけないということである。もっとも単純なのは、自派閥以外の人はずべて差別することである。また評者が著者の好意をえたいと思っているのではないとわかるまでは、贅辞を顔面どおりにうけとってはいけないということである。ライバルによる敵意にみちた書評も、気をつけて読まねばならない。この正反対の理由から、やはり気をつけるべきなのは、非常に近い仕事仲間や同じ派閥内の人の評である(49-50頁)。

こうした警告は、筆者も同感である。これも、自分が当事者の1人であり、その加害—被害者であるという反省があるからである。一流「経済新聞」の書評欄においても、近親者や同族らしい人たちによる、どうみても、なれあいと判断されるほかない論評が散見される。書評を手段として人情味あふれる学者間の交流すら観察しうるのである。

このごろ、筆者が思うことは、書評をものにするには、その相手以上にその分野におけるエキスパートでなければまずいという点である。結局、書評に接するときは、書き手の真剣さの度合いと利害関係についてしらべるべきなのである(50頁)。

第5章「パングロス先生とボードラー医師のひそみにならって」。アンドレスキーはいう。——善いとか悪いとか口に出していうと、なぜか、だれにとってか、なににとってか、と問われるだろう。そうなれば、学者としては、客観的でなんでもしているという仮面をとって、まず自分のよってたつ価値観を明らかにし、ついで、こういう条件を与えればああなる、

呑みにし、自分のよってたつ判断材料をもたない。ただうやうやしく、御説を拝聴し、無批判に引用・参照するだけなのである。

筆者は、権威者も、またこれの追従者も、ともに批判の対象にしてきた。それに対する反応はといえば、それはもう大変であり、やみくもに「けしからん」というものが多かった。どうしてそうなのかと問えば、とにもかくにも「権威者を批判することがいけない」のであり、くわえてついでに「その信奉者をやっつける」ことは「なおさらまずいのだ」ということなのである。これでは学問の発展は望めない。それに、そこには社会学者のユーモアのセンス（＝精神的余裕）など、ほんのちょっぴりもみいだせない。

アンドレスキーはいう。——もしわれわれが出あう社会学者が、それほど不誠実でも怠慢でも軽率でもないならば、人間事象を観察する社会学者としての彼の評価をきめる正しい指標は、彼がもっているユーモアのセンスである（99頁）。

この国の学者は、あくまで一般論だが、学問上の批判交換や論争交流になると、とたんに理性のバランスをうしないがちになり、感性のおもむくままに言動しやすい。これはユーモアのセンスに欠けるためである。自分とその学問に余裕があり、かつ自信があるならば、おまけにわずかばかりの「ユーモアのセンス」をもちあわせていれば、そんなことにはならないと思うのだが、あにはからんや、そうになってしまうのである。

筆者が『日本経営学史』でとりあげて、批判したある経営学者は、さらにその後、筆者が公表した関係論稿における批判をもうけて、それらにこう反応していた。[私信中では]もう寄せる年波には勝てないので（当時68歳）、「反論」できませんと温情のこもった返事をくれながら、なおそれ以後も、自説の特質はなんであるかを周囲にとくと説きつづけている。筆者は、この推移を目の当りにして、ある意味では啞然とし、またある意味では[ユーモアのセンスなど吹きとび]、怒りさえ覚えたしだいである。

その学者は、筆者が、ある年の経営史学会で研究報告をしていたとき、その会場で、どういう意味をもたせたいのかはよくわからないが、故意に「哄笑」し、筆者に対して特定の感情をもっていることを、まわりに伝えようと努力していたふしがあった。さらに、そこで彼は、「筆者の報告は他の学会で発表したほうがよるしい」というようなく指揮権まで発動してくれた（「質疑応答」における発言）。彼は、こうした行為によって、筆者〔彼からみればほんの「渾たれ小僧」であろう〕の存在意義を、まわりに軽く感じさせようともくろんだのかもしれない。——壇上で司会していた学者が、たまたま筆者の友人であり、その後、彼が筆者にもらした感想は、「そのような行為は明らかによくない」とのことである。もちろん、この段落の話は、前段の話のあとに起きたものである。

——ユーモアのセンスというものは、愚行に陥らない可能性と、社会情勢を現実即して評価する能力をはかるばあいの、もっとも信頼できる外的な指標であるといえる（100頁）。逆

説的にいえば、斯学界はユーモアのセンスを必要とするほど、対話も論争も体験してこなかったのである。

4. 第7・8・9章より

第7章「愚かさの効用」。——どんなにみずぼらしい者でも、大先生に挑戦することができ、もしかしたら大先生を破ることができるかもしれない。ところが、混乱と愚かさの世界では、大先生の降格を正当化したり、大先生のいったことを反駁するのを正当化したりするようなゲームのルールは、なにもないのである。混乱と愚かさは、大先生たちが一流の才能や技能をもっていないことがばれてこまるのを防いでいる。これはちょうど、裸のままなら(人びとを区別する)階統制度は崩壊してしまうから、衣服が、その階統制度を保護しているようなものである。裸の群集のなかでは、だれが陸軍元帥で、だれが大司教なのか、だれもわかりっこないからである(102頁)。

したがって、筆者のように、権威者も批判をうけて、問題があればその地位は降格されるべきであると考えたり、まっこうから彼らを批判することは大いに必要な仕事であり、これが公平なやりかただと考えたりする者は、無法者あつかいされ、いろいろな方面から迫害をこうむることは必至なのであろう。

アンドレスキーはいう。——独創的な思想というものは、そのなかにふくまれている独創的でない要素のおかげではじめて理解可能になるのであって、どこからどこまでも完全に独創的なものは[これが可能であればの話だが]、だれともわかちあうことができないのだから、役にたたないであろう(103頁)。

筆者が、斯学界の権威的理論〔とみなされているもの〕を批判したのは、そのどの部分が独創的であり、またそうではないかを鮮明にするためでもあった。だが、はからずも、こうした志向をもつ分析・批判は、当人たちとそのまわりの人たちの不興を買ったというしだいである。すなわち「裸の王様」と「その家来たち」が織りなす学問の姿を、客観的に描くことは、この国では許しがたい行為(→タブー?)であるようである。

いずれにせよ、権威者たちは、自分が相手にされなかった時代——彼らもみな経験している——にさんざんの苦勞をしているので、ひとたび弟子ができると、自分はずいぶん感心な弟子をもつことができたという快感によいしれ、まだエネルギーがのこっているばあいには、今度は、ひとつの学派を——新しいが必ずしも厳密ではない教義を定めて——創設することに精根をかたむける(104頁)。

論理的思考〔とその技能〕に訴えるかどうかによって区別される人間の範疇は、永久にひらかれたものでなければならない。それとは対照的に、独断的ドグマは、その信奉者を信奉者ではない人たちから分断できるし、実際、通常は分断してしまっている。そして、そのド

グマが不合理なものになればなるほど、それは凝集力のある集団をまもる障壁として、ますますよく機能するようになる。彼らとその主義を忠実にまもっているかぎりは、いっしょのままにいたるだろうが、ひとたび自立的に考えはじめると、彼らは別々の道を歩んでいくことになり、感情的に申し分なかった団結や共通の生活様式などは、御破算になってしまうだろう（104-105頁）。

既出の、「日本的経営論」の進展に大きな貢献をなし、論争をまきおこしているR・I教授は、その論争の相手の1人となったK・U教授の直系弟子たちから、「村八分」宣言〔住んでいる村はちがうが〕をうけたそうである。いいかえれば、その弟子たちは、R・I教授の論争は相手にしない、黙過する旨を申しあわせたという。この出来事は、論争〔とこれから派生する精神的負担〕を好まない、この国の学者の論理的思考〔とその技能〕の水準が、どのへんにあるかを示唆している。その弟子たちのいいぶんは、多分こうであろう。①自分たちの恩師を批判することじたいがけしからぬ。②論争そのものがまんできぬ。

——「かよわき者、汝の名は学者なり」。

アンドレスキーはいう。——信者は、人間理性にとっては不合理にみえることを肯定することで神への愛の証をたてるのだ、と(105頁)。独断的で馬鹿げた信念というのは、閉鎖的集団のまわりにはりめぐらされる壁としてはもってこいの材料であるが、高い知性にめぐまれていない大多数の人たちを差別し、遠ざけるものではない。これに対して、論理〔と科学としてしられるその適用〕は、理論的にはだれにでも利用できることはできるのだが、ただある程度の先天的な能力と、しっかり身についた知識とをもっている人にしか、実際には使えないものである。つまり、論理が強く訴えることができるのは、ほんの少数の人だけなのである（105-106頁）。

R・I教授もまことに御苦労さまなことであるが、斯学界に関していえば、彼が「論争」をとおして自説をきたえ、学問を発展させようとするさい、その相手たりうるに十分な資質と能力をもつ学者は、残念ながらほんのひとにぎりしかいないのである。

日本のパーナード経営理論研究についていえること。——社会科学を職業としている人たちにとって、もっとも簡単な仕事はなにかといえば、それはひろくしれわたっている著作を際限もなく解釈することである。そして、このばあい、明瞭さと簡潔さは、そのようなならだらしした仕事をへらす方向に作用するが、あいまいさと不明瞭さは際限のない仕事をつくりだすのを助長する。知的混迷の創造者たちは、寄生的性癖をもつ知識人たちによって有名になったのであり、よりいっそう知識人たちの寄生的性癖を助長している（107頁）。

第8章「客観性を装った逃避」。——われわれに要請されているものは、正義に道徳的かつ主体的にかかわっていくこと、換言すれば、人と制度に対して公平であろうとする意思、物欲しげで悪意にみちた思考の誘いにのらない意思、脅迫と誘惑に抵抗する勇気にほかならな

い(121頁)。権威者の学説・理論を分析し、批判することは、大きさというのではなく、〈正義〉や〈公平〉、〈勇氣〉を要するのである。これは、筆者の正直な感想である。

その結果、人間事象に関する真理を探究し、真理を暴露している人々は、どうしても人の感情を害さざるをえないので、不快な異端者とか危険な破壊活動分子といった異名をつけられがちである。どんな集団からも、強い先入観をもたれていないような問題は、まずほとんどないので、とくに「よく起こることだが」、勢力の強い党派が、「われわれに反対するものはわれわれの敵だ」という原理にしたがっているばあいには、完全に中立をまもりとおすすめとは、まったく不可能であるかもしれない(121頁)。

筆者は、戦時体制期の日本経営学の言論・文筆活動を徹底的に解明し、これに批判をくわえている。これに対して、S・U教授は、たとえばY・Y教授の経営「行為的主体存在論」に心情的に共鳴するあまりか、筆者のY・Y教授批判は「文面にとらわれたもの」だときめつける。S・U教授は、もともとマルクス主義経営学の立場で研究をすすめてきた学者であったが、その後、この立場に一定の批判を与えながら、Y・Y教授の立脚点に魅力を感じるような立場に変化している。このことにかかわるのかもしれないが、S・U教授は、筆者がY・Y教授に対してする「戦争責任論」的な理論批判を心よく思っていないらしい。

筆者はY・Y教授の意見にかぎらず、文献・資料の文面をとおして、——それが「眼光紙背に徹する」か、それとも「行間を読みとる」かは別にして——論者のいうところをありのままに把握しようと努力してきたつもりである。それを、「文面をとおして」しか把握しないのは、浅薄だというのである。反問したい。いったい、「文面」とおしてほか、どうやって論者の主張を把握すればよいのか、と。S・U教授は、Y・Y教授のシンパらしき口吻である。それでは、彼がY・Y教授の所説を、どう把握しているかといえば、その参考になる文献・資料は、いまのところなにもない。すなわち、彼のY・Y教授に対する理論的把握は、いかなるものであるか「文面をとおして」しりようがないのである。

筆者は、Y・Y教授の学説究明に、自分でもうんざりするくらい多大な労力をついやし、著作中で3篇、論文7本をあてて批判してきた。分量で勝負がつくなどというつもりは毛頭ない。それはともかく、そこまでS・U教授がいうならば、彼はY・Y教授の経営「行為的主体存在論」への共鳴者たる主体的な理論基盤を明確にすべきである。筆者に対する論評は、そのつぎの問題であろう。

学問は恋愛ごっこではない。「惚れた腫れた」も、それに無関係なことだとはいきれない。だが、このレベルから、「恋人」を批判されたからといって、すぐそれに、感性的な議論でのみ応酬するのは賢明でないだろう。まして、戦時中の学者としての文筆活動を、単に今日の関心からのみ解釈し、当時の社会科学者の発言としてのこされた〈論理と倫理〉の関係を焦点にすえないのは、かたよったみかたである。この点では、筆者とS・U教授の、Y・Y教

授「理論」の解釈に大きな溝がある。

客観的にみて、S・U教授のY・Y教授「所説」の解釈は、また、いつかのような、学者にとって困難な時代が到来したとき、同じように誰かが神がかり的な発言をしても〔これが学問の抑圧になったことはいうまでもない〕、いまからすでに許してよい、といているようなものである。自縄自縛である。S・U教授は、自分はそうはいっていないというのだが、筆者のうけとめかたでは、そうなるほかない。「歴史はくりかえされる」ことのないようにしたいものである。

アンドレスキーはいう。——客観性の基準がわかりにくいことや、客観性に完全に到達するのは不可能であるという事情にもかかわらず、客観性（それは中立性とは区別される不偏不党性をもふくんでいる）は、いぜんとして、われわれの努力目標となる。いやしくも、なにごとかを論ずるためには、「事実」に関するその言明が真実なのか虚偽なのかを、「現実」の存在との関連において判断しなければならない（123-124頁）。

第9章「方法論をかさに着ること」。——元来、単に目的に達する手段として評価されていたものが、しだいにそれ自身のために評価されるようになり、当初の目的が忘れられてしまうのである。粹組とか専門用語とか技法にばかり気をとられているような学者というのは、自分の道具をきれいにしておくことにあまりにも気をつかひすぎて、肝心の木を切る時間がまったくなくなってしまうような大工に似ている（127頁）。

日本の経営学者にも、同じような類例が多い。先述のY・Y教授しかり、筆者がその学説の特徴を「存在論的経営学」と名づけてみたN・I教授もしかりである。彼らは、方法論（自分の経営学「論」の見地）を強調することに学問の目的があるかのようにふるまい、それを現実にあてはめ使ってみようとし^{スローガン}ないのである。要するに、いさましい「かけ声」ばかりが聞こえるのである。

5. 第10・11・12章より

第10章「カムフラージュとしての数量化」。——この章では、H. A. サイモンが槍玉にあげられている。

アンドレスキーはいう。——半面だけの真理しかふくんでいない陳腐なものに数学的装いを凝らすことが、いかに馬鹿げているかの具体的事例は、H. A. サイモンの『人間の諸類型』である（151頁。日本語訳は、宮沢光一監訳『人間行動のモデル』同文館、昭和45年）。

サイモンの努力は、もしも、ことばの意味に鈍感であったり、社会生活の複雑さに気づかなければ、〔エンジニアリングの学位に相当する標準にまで〕数学を展開したところで、科学的発見をするうえで、なんらの助けにもならない。キンゼー報告のほうがまだレベルはずっと上である（152-153頁）。

いろいろな数式を使うことによって、立証がうまくいくようになったり、説明がよくできるようになったり、この数式のおかげで「われわれの要求をもっともゆるい基準におとしたとしても」、理解がずっと容易になったという事例はひとつもないのである(153頁)。

筆者は思う。まったくそのとおりである。サイモン『人間行動のモデル』は、この国の一部の学者から高い評価をえている。が、筆者が読んだかぎりでの感想は、それは数学的な術学の展開であるというほかなかった。数量化、計量的表現をとおして、なにを、どのようにいいたいのかが、必ずしも明晰ではない。結局、社会科学のばあい、透徹した論理的思考にもとづく明晰な叙事的表現にまさる、数量的表現は存在しないのである。

第11章「ごたまぜの隠密保守主義」。——この章では、M. ウェーバーとK. マルクスに関する言及をみてみたい。

ウェーバーは、1個の人間としてみれば、けっして、ごたまぜの隠密同調主義者の先祖ではないけれども、結果的にみて、他のどの偉大な社会学思想家よりも、ごたまぜ隠密同調主義者のトーテムの役柄を引きうけることになってしまっている(180頁)。

マルクスが、神の地位を占めるようになったのは、経済学と社会学に対する彼の偉大な貢献のせいではなく、彼の認識力ある洞察がふくみもっているメシアの神話とはげしい毒舌のためであった。つまり、彼は[他の社会主義提唱者とちがって]、具体的計画はけっして描かず、未来社会は非常によいものだと主張することにもっぱら限定し、マルクスの信奉者と自称する人々に自由行動を許容していたために、神の地位を獲得できたのである(179頁)。

斯学界には、一知半解のウェーバー信奉者や、盲信的マルクス主義者がいる。とくに、後者は、自分の立場に絶対的な確信をいただくばあいが多く、要注意である。彼らは、自分たちに対する批判をいみきらう。マルクスがいったそうである。「すべてのものを疑え!!」

第12章「専門用語とイデオロギー」。——今日、マルクスによって提唱された階級の基準は妥当性をうしなってしまうている。なぜならば、官僚制(公的なものも私的なものも)が急激に増加して、彼の予言がはずれてしまったからである。時代遅れの定義を万人に押しつけることで、共産主義の伝道者は、人々を自分たちの統治制度下では従順に、資本主義のもとでは反抗的になるように操作しているのである(191頁)。

マルクス主義の立場にある社会学者[もちろん経営学者も]は、それを採用するならば、現今の社会主義経済体制下の諸問題も、痛烈に批判しなければならないのに、これを怠っている。これでは〈マルクス主義〉者として一貫しないはずだが……。

アンドレスキーはいう。——社会科学に流行している、まわりくどい婉曲語法を平易ないまわしになおしていだけで、膨大な一冊の本が書けるだろう(204頁)。

第13章「技術トータリズム」。——サイバネティックスを使って、社会過程や政治過程を説明したり、分析したりすることを意図した出版物をみて気がつくことは、それらが科学的なひびきのする用語をまもってはいても、内実は平凡な説であり、陳腐な半面の真理にしかすぎず、完全な歪曲であるということである(212頁)。社会学や政治学におけるサイバネティックス・モデルは、社会組織と機械とのあいだの、かなりむりにこじつけた類似性から出発しており、人間や人間の役割がサーボ機構の部品と同一視されているからである。(213頁)。

そうした傾向は経営学に無縁でない。各分野、たとえば財務管理論、マーケティング論、生産管理論、経営システム論などにおいては、そのような弊害ははっきり出ている。

第14章「学界で出世する法」。——大学教授の権力は、考える人を犠牲にして口のうまい人を重視する結果を生んできた(231頁)。学会にあっては、学問の男娼たちが学界の大御所たちの寵愛をいかにして求めるかを観察し、大食堂やホールでの議論〔それは、だれが、なにを、どのようにえることができるか、という話題にもっぱら集中している〕に耳をかたむけてみることである(235頁)。

われわれの学界にも、同じような動向がないとはいきれないだろう。こういうことである。

アンドレスキーはいう。——人々は、富や権力をつねに称賛し、富や権力の所有者には自分たちがもっていない、すぐれた美徳があると考える傾向があるからである。彼らは、単調で骨のおれる仕事を、いわれるままにこつこつとこなす人間や、ごますり人間たちにかこまれているうちに、上に立つものの自己批判能力が衰えてしまうのである。社会科学研究では、利害関係を損なったり、感情を害して毛嫌いされるような本物の発見をするよりは、なにも成果をあげないほうが、まだ憤激を招かないですむということである(237-238頁)。

筆者が『日本経営学史』〔はしがき〕で指摘したことは、斯学界の若手研究者のなかから独創的発想や個性的な理論が、なかなか出現しそうもないのは、前述の状況がこの学界にもあてはまるためであるということである。また、筆者が『日本経営思想史』で告発しながら、戦時→戦後にかけての、この国の経営学者たちの理論的無節操を鮮明にした作業は、筆者の研究環境を悪化させるのに十分な要因をもたらした。もっとも若手研究者や一部の良識ある研究者からは、筆者を督戦する声も聞こえなくはない。しかし、それも多数派ではない。

研究の自立性。——着想が独創的であればあるほど、それが遭遇する抵抗がいかに大きいかということ、あらゆる科学の歴史が十分に証明している。

①コペルニクス——火あぶりの刑に対する恐れ。②ガリレオ——苦しい試練の体験。③ダーウィン——悪罵を浴びせられた。④ハーヴェイ——医学の聖書として奉られていたガレンの立場を逸脱したとき浴びた憎悪。⑤パスツール——医者職業をとりあげようとした企てにあった。⑥アインシュタイン——大学院で研究をおこなう候補者になることを拒否された。

⑦ニュートン——ケンブリッジで最初奨学金を獲得できなかった。⑧ロバチェフスキー——ユークリッド幾何学ではない新しい幾何学を発見し、それを発表したのち、狂人あつかいされた。⑨アベール (数学者) ——ほとんど全生涯をとおして極貧に苦しみ、飢えがもとで若くして死んだ。⑩ガロア——いまでは集合論として知られているものの、当時によれば新しい数学の分野の基礎を早くから築いていたのだが、彼は、そののち大学の数学科の入学試験を2回、失敗している (238-239 頁)。

第15章「グレシャムの法則とパーキンソンの法則」。——なみの社会学者は、りっぱな考えと半面の真理と、彼の論争多き分野で幅をきかせているばかりかばかしいことがらとの区別をつけることができず、したがって、彼らは、いとも簡単に人をまどわす神秘論者や大ぼろ吹き犠牲になってしまい、精神的墮落の仲介役をつとめることになるだろう (247 頁)。

学位も、大学の椅子も、有名な学会や研究機関の会員であるということも、その社会学者がまじめにあつかわれることに値するというのなんの理由にもならない。なぜならば、こうした名誉をえるための競争においては、知識や誠実さよりも、陰謀や自己宣伝の手腕のほうが重要であるということが多いからである (249 頁)。

筆者も、そのような事例を目前にしたことがある。そうした人々の行状は、自分の知識や誠実さを、陰謀や自己宣伝の手腕発揮のほうに活かして、人生競争にいどんでいるようにみえる。ある人の学問の内容が、なんらかの地位や名誉を付与するに値するという判断を働かすことよりも、それらを上手に入手するための世俗的な知恵や強靱な精神力の駆使に、人生の機微を働かすことのほうが、より肝要なのである。

アンドレスキーはいう。——研究大会や会議が機械的になってきて、議論というものがほとんど形骸化しており、その結果として、だれが見識があり、だれが見識がないかをみつける機会ほとんどどうしなわれている (252-253 頁)。

日本経営学会の全国大会は年1度のお祭りさわぎに昇華している。これを克服するためにできたはずの関係諸学会のなかにも、同じ徴候をみせつつあるものがある。

真実をすることが利益につながる技術やビジネスの活動分野では、能率という偉大な副産物を育ててきたが、これに対して、真実をしるよりもそれを隠したり欺いたりするほうが、割にあつような分野では、なにが起こったかは、いままでみてきたとおりである (264 頁)。

7. 第16・17・18章より

第16章「象牙の塔か官僚主義か」。——教えることは脳に悪い。なぜならば、自分より知的に劣っている、いわば強制された聴衆に習慣的に話をしていると、熱弁をふるうという習慣は簡単につくけれども、自分の意見をよく考えたり、批判的に検討したりする習慣はなかなかつきにくいからである。さらにもうひとつの欠点は、ひとつの職業に寄生して永久に安

住してしまうということである。すなわちこうした職業についているかぎり、仕事の価値をはかられることもないし、たとえまちがった研究方法や不注意から悪影響をおよぼしたとしても、悩まされるのは、のちの世代の人々であって自分ではないからである（265頁）。

だから、大学の研究者は、あたりまえのことだが、たゆまず研究上の努力をしていなければならない。教えることだけをやっているなら、早晚、知的地盤沈下は阻止できない。それを予防し、また自分の学問水準をより高めるためには、ひたすら研究に邁進していなければならない。そうでなければ、人畜無害だが、存在価値のまったくない、〈一見、科学者〉ふうの人間、いいかえれば、なんの意味ももたない、もしかしたら社会的害悪であるかもしれない人間を育てるだけのことになる。学者ほど自分に甘い存在は他にないのである。そのくせ自負心が強く、過度にうぬぼれている人種なのである。自主規制を学者に求めることは至難である。

勤務時間は短く、休暇は長く、そのうえ地位の保全はかたく保障されているので、怠慢であっても老いぼれても、けっして職をうしなうことはない。このような職業に就いていることは愉快なことにちがいない。もしもあなたが科学者か技師であるとして、あなたが狂人じみていて、重大な事故を引きおこすかもしれないということを人に気づかれたとするならば、あなたはその研究所から締めだされかねない。しかし、芸術や社会科学の分野では、目がみえなくとも、耳が聞こえなくとも、半分体がマヒしていようとも、あなたがしていたことを、ほとんどすべて忘れてしまったとしても、仕事をつづけることができる。もしもあなたがいつのまにか気が狂ったとしても、認知可能な音を発することができるかぎり、深遠な真理の発見者として喝采して迎えられる可能性を十分もっているのである（265-266頁）。

こうした怠惰を管理制度をしいて防ごうとするような試みは、事態をよりいっそう悪化させるだろう。とくに、少数の創造的な人々——彼らの仕事は、往々にして多くの術学者や怠惰なものを扶養する費用の何倍ものものを社会に還元している——の熱意が、そがれてしまうことである（266-267頁）。

教育の分野には、能率というものを査定する尺度がないので、パーキンソンの法則は、とりわけうまく妥当する。知的創造性と型にはまった行政とは両立しがたいという根深い問題がある（268頁）。

筆者のしるかぎりでは、日本の大学の現状もアンドレスキーのいうとおりに動いている。この世界においては、社会科学者が、学問や研究に自分の生命をかけるなどといって、大仰に見栄を切ったりする必要はない。また、彼らはどんなことをいっても、これが他人のいのちをうばったり、あるいは運命をきめたりすることはほとんどないので、ある意味ではいいたい放題をいえるばあいがある。それでも、これはまだいいほうなのである。というのは、そこまで積極的に発言したり、ものを書いたりしない学者のほうが、はるかに多いからであ

る。まさに「沈黙は金!!」である」。なかには、黙りこみきれずに、大学行政に自分の手腕を発揮することによって、学者(?)としての才能を復活させ、自己満足を与える者も登場することになるのである。いうなれば、敗者復活戦!!

全体的展望でみれば、そこには「愚者には楽園」があるのだが、一部のまじめな学者たちが創造的仕事に従事することによって、一般大衆がその〈楽園〉をのぞきみることを防いでいてくれるのである。

第17章「学問の砦に対する攻撃」。——マルクスがどんなに偉大であろうとも、彼は、他のすべての思想家と同じように、自分自身はほんの2、3のヒントを考察しただけであって、彼の思想や素材の大部分は、先人と同時代人とからとりだしてきたものである(283頁)。

非常に偉大な思想家でさえも、新しい洞察を手探りで探しているうちには、根本的なまちがいをすることもあるというのに、ただの偏屈者は、彼の誤りがはっきりと明らかになったとき、なにをやるかという、そうした巨匠たちを、かえってまったく誤りのないものとして、どこまでも主張しようとする(284頁)。このことは、この国の経営学界にもよくみられる現象である。先学の主張の完全性を疑う能力に欠けるのである。八百万の神々の徘徊が許されているのである。

第18章「倫理と知識の進歩」。——それでは、アンドレスキーは、いったいどうすればよいというのであろうか。

彼はいう。——そういったからといって、それはなにも社会学者が修道士のまねをして修道院にはいれば、事態がよくなるだろうということではない。私がいいたいのは、欲得ずくのごまかしを断固非難し、人間の自然な性向であるへつらいや服従にも敢然と立ちむかい、同じく人間の自然の性向であるお金を管理する人間や強制的な権力をにぎっている人間に心酔してしまいがちな気質をきっぱり断ちきるような、倫理的な戒律なしには、社会科学の着実な発展は不可能だということである(287-288頁)。

人類は、これまで、数多くの驚くべき道具を発明してきたがそれらは、理性を最大限に働かせて用いたとき、はじめて文明に役立てることができるのであって、そうでなければ文明をほろぼしてしまうかもしれない。そうして、人類は、この点では、もはやあともどりできないところまでできてしまっている(289頁)。

結局、社会科学は、いろいろな体制や反体制の周辺部〔完全なアウトサイダーや追放者たちによって培われるものではない〕でこそ真に培われるものであって、華々しい脚光を浴び、富を一身に集めているところでは墮落するものである(290頁)。

——日本の学者たちの生活は、〔一部の恵まれた者をのぞき〕お世辞にも豊かなものとはいえない。若手講師クラスは、日本の平均的サラリーマンの給与とたいしてかわらない年取しかえていない。一方、権威的理論をになっている学者たちのそれは、若手研究者をなん人も

雇って事業ができるくらいの水準に達しているはずである。彼らがほんとうに権威者であり、りっぱな理論をつくりあげてきたというならば、それはそれでよいだろう。他人がとやかくいう筋あいはない。残念ながら、そうとはいきれないところに、問題の深刻さがあるのである。

III む す び

アンドレスキー『社会科学の神話』の訳者はいう。同書は、批判に対する代案を積極的に出していない欠点をまぬがれていないものの、彼の批判は、思いのほか考えぬかれたものである。どうか、アンドレスキーの批判を冷静にうけとめぬく姿勢をもって欲しい(〔訳者あとがき〕298頁)。

ある年の日本経営学会全国大会で、若手研究者が、H. A. サイモンの経営学方法論に関して、その非科学性を指摘する報告をしたとき、これに対して、激昂したようすで質問をしていたのが、アメリカ経営学を自説のたいせつな立脚基盤にする、K・U教授とT・K教授であった。その光景をみて、筆者はもう少し冷静に対応できないものかといぶかったしである。——冷静な精神に健全な頭脳が宿る。

アンドレスキーの今回の著作は、こう評されている。ぬるま湯のなかの論争しかしらぬ私たちも、ときには本書のごとき熱湯や冷水を浴びてみるのもよいだろう(『日本経済新聞』1983年4月10日、12面、西部 邁「社会科学の神話—高名な学者をメッタ斬り」)。

筆者は、戦時体制期の日本経営学が、客観的に書きのこしてきた〈戦争責任論〉的課題を、『日本経営思想史』(マルジュ社、1983年)で詳細に分析し、批判的な考察をおこなった。この著作を公刊するまでの行程中、大学院時代に教えをうけたことのあるH・H教授は、たびたび、「もののいいかたが刺激的すぎるので注意せよ」という助言をくれた。遺憾なことに、筆者はこの助言を活かせないでいる。別言すれば、その必要性を感じていないのである。なぜか。それは、この国の経営学者も欧米の学説・理論に対する検討では、筆者とまったく同様な、またはそれ以上にきびしい筆致をひろうしているからである。ところが、現在元気に活躍しているいわゆる権威者たちのことに論及する段になると、とたんに学術的文書らしからぬ「敬称」「敬語」(これらは本来、学問的な叙述に無用であるはずのもの)が多用された文章を書きはじめる。これは自国人だけに使用される特殊慣習である。本来なら、このことじたいがふしぎがられてよいものであろう。

拙著『日本経営思想史』に対しては、最近の思想的状況の関係もあってか、公刊直後に某通信社よりインタビューをうけた。地方紙9社の文化欄にのったその記事の見出しは、こうなっている。たとえば、「経営学者の戦争責任追及—戦時期の言動つづぎに分析」(『神戸新聞』1983年8月18日、8面)。同書は、いわば斯学界の偶像破壊をめざしている。つまり、常識的に

いえば、やっではいけないことをやっていることになる。

この国の経営学のなかには、自分の恩師がいちばん尊く、最高峰にあると信じ、その理論を関係領域において頂点に位置づける者がある。たとえば、Y・H教授に対するO・M教授、S・K教授に対するH・T教授の評価がそれである。Y・H教授、S・K教授の両者(いずれも故人)については、『日本経営思想史』が戦時期における文筆活動を観察している。

いまから約20年近くも以前に、Y・Y教授とY・K教授の論争があった。その結果は、Y・K教授が、〈年輪の差〉ゆえ、Y・Y教授との論争には敗けた、と周囲からまちがいに判断される言辞を吐いて、明らかになった。そうすると、若手学者はいつまでたっても、先学に頭があがらなくなりそうである。学問に年輪〔年齢〕の差などないと叫んでいるのが筆者である(拙著『日本の経営学』河西, 昭和52年, 第3章参照)。年輩学者もかつては若年であったし、若手もそのうち中堅になり、熟年に達する。学問の世界は実力主義が通用するものと信じた。

このところ、斯学界でこれといって注目すべき「原理論」的著作が登場しないのは、Y・K教授のような心的状態をわれわれの世界から払拭できていないためであろうか。

さて、I・Y教授は、Y・Y教授やA・Y教授に関して、彼らの謬説は世をまどわすこと甚だしい、とくに学生諸君には、これらの人々〔上記2名にくわえて、S・M教授、K・T教授、K・U教授も同列だとする〕の経営学は、けっして読む必要もなければ、また読めば甚だしい毒素の悪しき感染をうけるであろうと警告している。

筆者が『日本経営学史』(白桃書房, 昭和57年)でとりあげ、批判した経営学者の姓名のうち5名のそれは、前段でI・Y教授が出しているものである。同書が究明した諸学説・理論は、化石化せしめ永久保存する価値はあるが、とりわけ学生に推奨できるものではない。それらは関係分野の専門家だけがあつかう封印書物にしたほうがよいかもしれない。ただ現時点では、学生用としてそれらに代わるよい経営学書がないことに問題を感じる。

『正規の簿記の諸原則』という著作を公刊し、日本会計学界人士の不勉強とそのていたらくをするどく指摘した、T・I氏〔公認会計士〕はこう述べている。

象牙の塔の住人は、その弟子達を通じ、その所説によって、何千万という国民に意識の方向を与え、影響を及ぼされる立場にある(同書, 森山書店, 1983年, 25頁)。

学問の世界では、とりわけ、先学の教えを吸収消化し、それによって育てられ、かつ、それを乗り越えてゆかねば、学問の発展は期待し得ず、また学恩を報謝したことにはなるまい(自序, 2頁)。

こういう、実業界の識者ととともに、かつて、同じ指導教員(T・N教授)から教えを乞えたことは、筆者にとって僥倖であったといえようか。

筆者は、『日本経営学史』と『日本経営思想史』をもって、T・I氏がねらったものと同様な意図を、経営学界にむけて実現しようとしている。だが、これに対しては、その意図をよく理解できない人々から、性急な非難が生起していることも事実である。

筆者も、つぎの点では、斯学界に対して同じ心がまえのつもりである。

本書〔『社会科学の神話』〕を読まれた読者は、アンドレスキーが既成の社会科学とアカデミズムを口をきわめて批判しながらも、その世界に愛惜をもって内在的にのりこえていくことを説いていることを発見するであろう（〔訳者あとがき〕299頁。カッコ内補足は筆者）。

筆者は、もともとつぎのような研究方針にもとづいて、日本経営学史を研究している。

特定のイデオロギーを持たない私が用いる批判の方法は、もっぱらロジックス（論理）とセマンティクス（意味論）である。つまり、相手のいっていることが支離滅裂ではないのか、相手のいっていることが、具体的な現実としては何を意味しているのか、ことばづらでは矛盾がなくても、現実に置きかえてみると矛盾が生じてこないか、という点をついていくということだ。これは、ソクラテスはその時代のあらゆるイデオロギーを論破するのに用いた手法で、別に目新しいものではない（立花 隆『日本共産党の研究(一)』講談社、昭和58年、〔はじめに〕5頁）

〔付記〕文中、識者の姓名イニシャルには「教授」および「氏」をつけてある。語呂が悪いので、あえて〈敬称〉を付したしだいである。

並木信義はいう。S. アンドレスキー『社会科学の神話』は、経済学よりはむしろ社会学中心の批判である。もっと論理的に経済学者自身が、「呪術としての経済学」を論じたらおもしろいだろう（並木信義『経済学はなぜ経済が見えないか』通商産業調査会、昭和58年、26頁）。

1983. 10. 1

（べえ ぶ ぎる 経営学原理専攻）